

自治体名		茨城県	栃木県	群馬県	埼玉県	千葉県	東京都	神奈川県	長野県
報告書	構成意見	・従来の構成と同様にして、各項目中に「四季の平均的な解析、高濃度イベントAの解析、高濃度イベントBの解析、...」項目のまとめ、の順に記述する。項目毎に1つの自治体が主担当として執筆する。	・これまでの報告書と比較を容易にするため、本編の項目については大きく変更せず、内容を「四季の平均的な解析」をメインにするのはどうか。	・「四季の平均的な解析」では、季節毎に章(あるいは節)を立てる。 ・解析内容は、各地点のPM2.5平均組成を求め(成分積み上げグラフを作成)、それを基礎データとして考察する。季節的、地域的な特徴を主眼に解析し、成分濃度の変動グラフ等は、説明上、必要であれば追加する。気象概況についてもこの章の中で述べる(降雨が連続したなど、特異的な現象があったかどうかの簡単な内容)。 報告書構成案 1. はじめに 2. 調査概要 3. 各季節におけるPM2.5組成の特徴 3-1 春季、3-2 夏季、3-3 秋季、3-4 冬季 (4. 発生源寄与解析?) 4 (5?)、高濃度事象の解析 4-1 発生状況、4-2 成分および常時監視データの解析 5 (6?)、まとめ	・1. 基礎解析、2. 高濃度事例解析のように分け、1で成分毎に季節毎の概況を執筆、2で高濃度事例について総合的な検討を加えるのはいかがでしょうか? (例として具体的な案を別紙にまとめました(長谷川))	・第1章と第2章は同じ。第3章は天気図を15個×4頁並べて、コメントは簡単にする。光化学スモッグ注意報・降雨・降雪については、表もしくはチャート形式で示す。第4.1-4.5章は、季節平均(14個の平均)で各地点を比較し、季節別及び地点別の特徴を記述する。日データの解析は、従来の4.7章で成分分析の全測定期間で高濃度日を抽出して記述する。ただし、データ数が膨大であり、ごくローカルな汚染等の外れ値の処理が必要なので、日データの解析時か、別の章で検証する。方法としては、統計的な棄却か、マスクロージャーモデルなどが考えられる。 このように構成することで、従来よりむしろ簡略化され、なおかつ通年での解析となる。	・報告書の構成は結果の解析内容に係わることと思いますが、結果の解析については担当者によって視点が異なって来るのはある程度やむを得ないかと思いますが。関東甲信静の自治体の行政、研究に係わる担当者が一堂に集まって検討を加えているこの会議の良さを活かして更に話し合いを進めて行ったら良いと思います。 ・なお、上記の内容に係わらず、測定データについては今まで通り利用し易い形で提供して行くことは今後とも必要なことと思います。	・四季の平均的な解析は主要構成成分の特徴把握と発生寄与解析を主な目的とし、詳細な解析(前駆物質濃度の変化など)は行わない。ただし、期間中に高濃度(35 µg/m3超)が発生した場合は前駆物質濃度変化を含めた解析を行う。 ・高濃度時解析(成分分析期間外に発生した場合を想定)の具体的な内容は、本年度に実施する解析を踏まえ今後議論してはどうか。	・「四季の平均的な解析(従前の解析の簡略版)」の後に「年間を通じたPM2.5高濃度の出現状況」の章を入れ、その次に高濃度時解析(イオン成分、炭素成分、無機元素成分、発生源寄与推定、常時監視時間値を用いた解析)を入れる。
	別様案								
講演	内容	・PM2.5対策の取り組みについて(環境省)			・発生源調査について、結果のおさらいや課題、調査上の問題点などを意見交換するのによいのではないかと思います。(その場合、東京都、千葉県、埼玉県(行政担当者も含め)、あるいは委託先の日環センターが演者になるか) ・2013年8月に見られた夏の越境大気汚染に関する事例解析など ・発生源寄与解析手法や解析事例などについての最近の知見(具体的内容にもよるが、高崎経済大 飯島氏、名古屋市 池盛氏・兵庫県 中坪氏、日環セ 岩本氏) (質問から若干外れますが) ・外部へ非公開/公開にも寄りますが、非公開の場合でしたら、本会議では行政担当者も参画していることから、例えば大気環境学会年会の研究発表から演者を選び、意見交換会のような形にしてもよいかも思いません。公開の場合には、関東支部粒子状物質部会との共催にはいかがでしょうか?外部講師謝礼も支出可能です。	・愛媛大での大気環境学会都市大気エアロゾル分科会のテーマである「有機マーカ-に着目したPMの起源解析」もしくは、環境省が平成26年3月にまとめた「PM2.5二次生成粒子の挙動解明に関する文献調査報告書」の内容紹介			
	推薦講師	環境省水・大気環境局大気環境課 環境省水・大気環境局自動車環境対策課			・東京都環境科学研究所 上野 広行 ・群馬県衛生環境研究所 熊谷 貴美代 ・日本環境衛生センター 高橋 克行 ・埼玉県環境科学国際センター 米持 真一				

自治体名		静岡県	さいたま市	千葉市	横浜市	川崎市	相模原市	静岡市	浜松市
報告書	構成意見	・報告書の読み手にとって分かりやすい構成が良いと思います。 例えば、PM2.5年間の濃度状況 成分分析期間 高濃度イベント毎の解析 は自動測定器データを用いて、平均値的なグラフや表、時系列グラフ、高濃度日の集計等 は成分分析期間の気象や濃度等のデータ(期間別、成分別)を、期間中の高濃度日の有無に関わらず、ある程度集計して表やグラフに纏める。 は年間を通じた高濃度イベントについて、気象、成分分析データ、その他常時データ等を用いて詳細に解析する。		・今年度作成する調査報告書同様に「年間を通じたPM2.5高濃度の出現状況」の項を設け、PM2.5の日平均値が35 µg/m3を超過した測定局が多い日(期間)を抽出する。 抽出した日における気象的条件、大気汚染(NO2,SO2,etc.)状況について考察する項を更に設ける。 四季の平均的な解析についても、高濃度時解析とは別に項を設ける。	・四季の結果について、期間平均濃度を地域別にそれぞれグラフ化する。高濃度日(日平均値が35 µg/m3超の日など)が調査期間内に見られれば、前後数日分を別途詳細に解析する。 ・現在の報告書の夏季「調査結果」に四季及び高濃度時の調査結果を追加する。 4 調査結果 4.1 粒子状物質濃度 <途中省略> 4.7 年間を通じたPM2.5高濃度の出現状況 4.7 四季のPM2.5濃度解析(平均値による評価) 4.8 PM2.5高濃度時解析	・章分け、執筆分担の分け方は現在の流れと同様としてはどうか。 (4.1 質量濃度 4.2 水溶性イオン成分濃度...とし、各項目で四季の平均的な解析)四季の解析を行う初めてのケースであるため、まずは同様の構成とすることで全体像を把握することを目的とし、これまでのデータの蓄積にさらに知見を積み重ねることとなるものと考える。 ・無機元素は項目が多いため、挙動に特徴のある元素や指標性の高い元素(例えばCMBで用いる元素等)を解析対象としてはどうか。	解析期間が多くなったことにより、各自治体の執筆にかかる負担が大きくなるのが想定されるため、具体的な取りまとめ方法については各自治体の認識の統一を図れるように議論することが必要と考えます。	従来の報告書に下記を加えてはいかがでしょうか。 ・各成分(EC、OC、無機陰イオン、無機陽イオン、無機元素等)の積み上げグラフについて、季節ごとの比較 ・4.5発生源寄与の推定について、季節ごとの発生源寄与推定結果の比較	・可能であれば、報告書に「要旨」をつけるのではないかと考えます。
	別様案								
講演	内容	・粒子状物質と健康影響に関する内容			・PM2.5の発生源については国や自治体による調査が進められている。発生源調査に関する全般的な話(測定方法、測定結果の解析及び成分濃度と発生源の関係等)に加え、JISによる規定がない二次生成粒子(凝縮性ダスト)の測定方法について、検討している専門家による最新の検討状況について講演を依頼する。	・環境省事業である「平成26年度微小粒子状物質(PM2.5)自動測定機1時間値に関する精度解析検討業務」及び「平成26年度微小粒子状物質(PM2.5)発生源寄与割合推計に関する検討業務」において得られた知見について、自治体への情報提供(講演が可能であればお願いしたいと思えます。)	群馬県及び神奈川県で行っている、常時監視測定データにおけるPM2.5の高濃度日において、成分分析や他の大気常時監視測定項目の測定データを解析した結果から新たな知見等があれば、それについて講演していただけると、興味深い内容になると考えます。	・自治体等のPM2.5成分分析結果を基にした解析状況や考察(環境省の進捗状況)について ・健康影響(医学研究)等について、他分野の最新のPM2.5研究	
	推薦講師				・PM2.5排出インベントリ及び発生源プロファイル策定委員会 ・東京都環境科学研究所	環境省			